

歴史社会学を志す者は、資料と向き合い／記述し／分析することにこそ意義を見いだす。だが、その研究の中で、現代の〈社会〉を考える上でどのような位置づけにあるのか、という逡巡が浮かんでしまうこともあるだろう。このようなときに、本書は研究の位置を確認するための地図のひとつとなってくれる。本書の翻訳を喜ぶたい。

関連文献

- クロスリー（西原・郭・阿部訳），2002=2009，『社会運動とは何か』新泉社。
ハッキング（出口・久米訳），1999=2006，『何が社会的に構成されるのか』（抄訳），岩波書店。
小路田泰直他，2009，『比較歴史社会学へのいざない』劉草書房。
酒井泰斗他編，2009，『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版。
折原浩，2010，『マックス・ヴェーバーとアジア』平凡社。
武川正吾，2009，『社会政策の社会学』東信堂。
太郎丸博・阪口祐介・宮田尚子，2009，「ソシオロジと社会学評論に見る社会学の方法のトレンド 1952-2008」
第 82 回日本社会学会大会。
筒井清忠編，1994，『歴史社会学のフロンティア』人文書院。
上野千鶴子，1998，『ナショナリズムとジェンダー』青土社。

「満洲」研究における社会学的視角

—ルイーズ・ヤング『JAPAN'S TOTAL EMPIRE』にみる満洲研究の可能性—

（ルイーズ・ヤング著『総動員帝国—満洲と戦時帝国主義の文化—』岩波書店，2001年）

名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程

石橋 康正

「満洲」研究の動向

本書は 1998 年刊行『*Japan's Total Empire: Manchuria and the Culture of Wartime Imperialism*』の邦訳書である。邦訳書が出版された 2000 年前後は、日本において満洲研究が大きく飛躍し始める年でもあった。2002 年には学芸雑誌『環』（藤原書店）が、「満洲とは何だったのか」というタイトルで特集を打ち、その中で歴史学・経済学・社会学・文学など様々な視点から満洲を捉える試みを行っている。

近年では、社会学においても満洲を扱った研究が活発になりつつある。たとえば、国際社会学を専門とする蘭信三は、帝国期日本における植民地支配の流れを、マクロな人口移動・ミクロな生活世界の双方向から捉える研究を行っている。また満洲をめぐる問題群において現在なお課題である「引揚者・帰国者」「中国残留日本人」の問題も、当時者たちのアイデンティティや生活世界という視点から、ライフストーリーなどの手法を用いて研

究されてきている。社会学における満洲研究の動向は、今後ますます着目されてくるテーマであろう。以上、満洲研究と社会学の関連を概観したところで、本題であるルイーザ・ヤング『総動員帝国』について見ていきたい。

同時代の世界の中に布置される「帝国日本」

本書の最も際立った特徴は、満洲をめぐる 20 世紀初頭の「帝国日本」の体制を、同時代における世界情勢の中に布置して捉えている点である。著者自身が語るように、当時の帝国日本の体制は、アメリカのそれを類似していた部分が多い。しかしアメリカも含めた欧米諸国の帝国の姿との相違点もクリアに述べられている。簡潔に述べておけば、それは日本という極東の島国が急速に近代化を遂げた点に求められる。激動の 20 世紀前半において、日本が近代化を推し進め、帝国主義体制のもとに近隣諸国を次々と植民地化し、果ては「大東亜共栄圏」という国家構想を描くまでに至る歴史文脈のなかに、「満洲国」は布置されるのである。

「総動員」が意味するもの—労働者、女性、様々な連帯と運動

著者によれば、当時の日本における満洲への熱狂には、様々な主体があらゆる形で動員されていた。たとえば、当時社会的地位が低かった労働者や女性たちが、帝国ナショナリズムに接近するために連帯していくという運動がみられた。労働者や女性たちは、それぞれ自らの社会的地位を上昇させるために、全国各地でネットワークを結成し団体や組織を設立し、「われわれも国へ奉仕する」という声を挙げていた。つまり満洲をめぐる当時の帝国日本では、社会的地位の低かった労働者や女性たちが、ナショナリズムに迎合するという「手段」を用いて、それぞれが「労働者団体」「女性団体」として凝集し、地位向上という「目的」を果たしていったわけである。

この点に関する著者の議論は事実の記述に留まっている。しかし当時の労働者や女性たちの運動・団体設立といった凝集プロセスは、社会運動史的な視点からの考察へと興味を駆り立てる。いみじくも彼／彼女らが「帝国ナショナリズムに呼応する」という手段を用いた点に、帝国期日本における満洲への熱狂の実態が生々しく伝わってくる。

満洲研究の今後—社会的視角の可能性

歴史には常に「当事者」が存在する。その当事者たちは、いずれはいなくなる。原爆被爆者やハンセン病患者、そして中国残留日本人や引揚者—こうした問題群に対して社会学は、「記憶や経験を語り継ぐ」ことの可能性を検討することで応答してきた。満洲もまた、戦争の世紀といわれる 20 世紀の歴史の中から徐々に現代に溶け出しつつある。そうした歴

史を紐解く作業を行う場合、当時の「社会」がどのようなものであったのかを、可能な限り体系的に理解することが重要な意味を持つ。

そうした意味で本書は、帝国主義下における日本社会の様相を非常に広範な視点から記述しており、満洲研究に取り組む際には多様な枠組みを提供してくれるはずである。政府や軍をはじめ、メディア、知識人、企業、地域社会、農民など、あらゆる主体があらゆる形で「満洲国」という壮大なプロジェクトに参加するという文字通り「総動員帝国」であった当時の日本を知ることによって、多くの問題群が浮かんでくる。近代化の産物としての満洲は、ネーション形成とナショナリズムといった国家論的な視点や、総動員の過程にみられた社会運動史的な視点、そして戦後社会にもたらされた引揚者や残留日本人たちのアイデンティティ問題など、実に多様なテーマを内包しているわけである。

関連文献

- 蘭信三, 1994, 『「満洲移民」の歴史社会学』行路社
——編著, 2008, 『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
藤原書店編集部編, 2006, 『《新装版》満洲とはなんだったのか』藤原書店
坂部晶子, 2008, 『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』世界思想社

Ⅲ 研究会紹介

不老会（方法論研究会）

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程
木田勇輔

先輩方から受け継いできた不老会も、立ち上げから早数年ということになるのであろうか。こういう書き出しになってしまったのは、実は筆者はすでに不老会の設立当時を知らない世代の大学院生だからである。2008年度から不老会の部会として立ち上げられた「方法論研究会」は、1~2ヶ月に1回のペースで読書会・研究会を続けており、今回このスペースをお借りして、その現況をご紹介させていただきたいと思う。

方法論研究会は、社会科学、特に実証系研究における研究方法の基礎を学びなおすために立ち上げられた研究会である。私たち大学院生は普段自分の研究テーマを追いかけるのに夢中（必死?）であり、いざ研究報告という際になると、「その現象をどのような枠組みを使って説明するのか」「変数はどうやって測るのか」など、研究の土台についての議論をすっかり忘れてしまいがちである。とりわけ因果関係に関する説明の欠如は、時として研